

## 《WE 認証者インタビュー》

### 部門問わず WE 取得を奨励

——耐摩耗、耐熱加工の肉盛溶接で産業界に貢献——

ウェルディングアロイズ・ジャパン（本社・埼玉県久喜市菖蒲町）は、表面改質に特化した事業を展開し、耐摩耗や耐食を目的とした自動肉盛溶接の施工を中心とする専門企業として、発電や製紙、化学などの各種プラント他の稼働維持に欠かせない役割を果たしている。さらに「開発型中核企業」を標榜し、自社で使用する自動溶接設備の開発も行いながら、顧客の機器やシステムの長寿命化、資源の再利用に貢献している。

また同社は創業時から社員への溶接管理技術者（WE）の取得を奨励。事務スタッフや外国人研修生を含めた約40人の社員のうち約6割にあたる25人がWE1級または2級を取得する。2002年に同社に入社し、技術部長などを経て、昨年2月に代表取締役社長に就任した福本宏昭氏（59）に話を聞いた。

#### 株式会社 ウェルディングアロイズ・ジャパン

代表取締役社長 福本 宏昭 氏



#### ●グローバル化の一翼を担う

1966年にイギリスで創立し、世界で28以上の企業からなるウェルディングアロイズ（WA）グループの一企業として、自動溶接設備の開発といった生産技術に関する開発センターとしての役割を担う。ウェルディングアロイズ・ジャパンは、プラントメーカーや、溶接材料メーカーなどを経験した青田利一・名誉会長が1999年に日本法人として高い企業理念のもとに設立。「日本の国内市場に合わせた自主性の高い企業運営を、設立当時から現在に至るまでまかされている」。

同社の肉盛溶接は、火力発電プラントを例にすると、燃料となる石炭を粉砕するための堅型ミル、高温環境で使用されるボイラ火炉壁等に適用され、耐摩耗や耐食皮膜の形成を目的に施工される。費用対効果の観点より「耐摩耗・耐食材料を必要な表面に、肉盛溶接することにより、コストと品質を両立させた機能を与えることができる」と福本氏はそのメリットを語る。



本社工場外観

## ●人材育成の理念

「溶接技術者を育成することは事業展開の上でもっとも大切なこと」との理念のもと、技術、営業を問わず「WE1級の取得」を同社では会社の目標として掲げる。

資格取得のために、課外授業に当たる溶接講座を月に2回程度社内で行うなど、全社を挙げた教育体制を築いてきた。

また、技能に関しても「肉盛溶接を用いることによる機器再生事業において、溶接、検査・計測、研削等は核となる技術。極力自動化を推進するが、手作業による部分も残る。自動化をするにしても技能の中で最も重要な部分を反映するべきで、技能を無視しては実際に役立つ自動化技術の確立ができない」と、技能と技術の融合を重要視している。

## ●WEを現地施工に生かす

創業当初より「ものづくりは人づくり」であり、我々は技術集団を目指す」と目標を掲げ、「WE取得は現地施工をするにあたって重要な意義を持つ」と福本氏はその意義を語る。

「施工責任者として顧客と仕様確認ができ、技術に対する十分な説明ができる能力が必要」。これまでを振り返り、顧客との対話の中でWE取得が生きた場面が何度もあったという。「当社は溶接のプロ。顧客にも溶接のプロはいるが、さらに我々はノウハウや経験を積んだ肉盛溶接のプロでもある」。顧客の中には溶接に関する知識があっても、肉盛溶接についての認識が乏しいケースも多いという。

「表面に機能を付与することが当社の使命で、例えば割れの有無ひとつとっても、一般の継手溶接と表面処理の肉盛では許容されるものや位置づけがまったく違う」。こうした違いについても、継手溶接と肉盛溶接のどちらか一方の偏った知識だけでは、顧客を納得させることはできないため、WE取得を通じて得た知識が生きた知識となる。

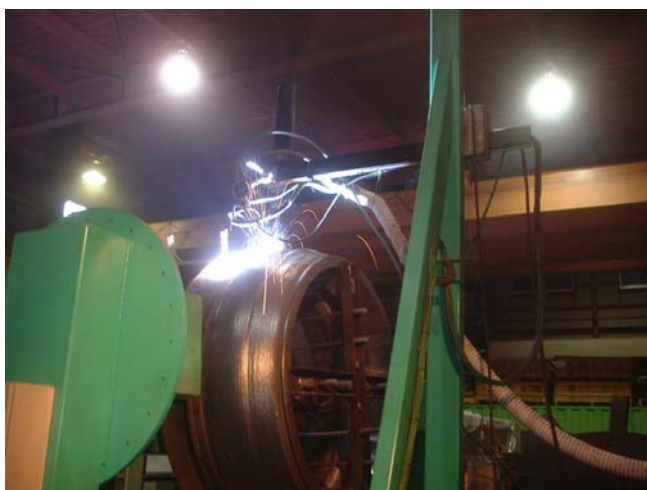
## ●ポリテクセンターで溶接に会う

福本氏は2002年の入社以来、様々な溶接施工の仕様確認や、品質検査、指導監督などを行ってきたが、入社前は大手メーカーでプラスチック成型の開発業務を行うエンジニアだった。事業統合に伴い退職後、ポリテクセンター埼玉のメタルアーク科に入学し、そこで必須科目の一つとして出会ったのが溶接に触れた最初のきっかけだった。

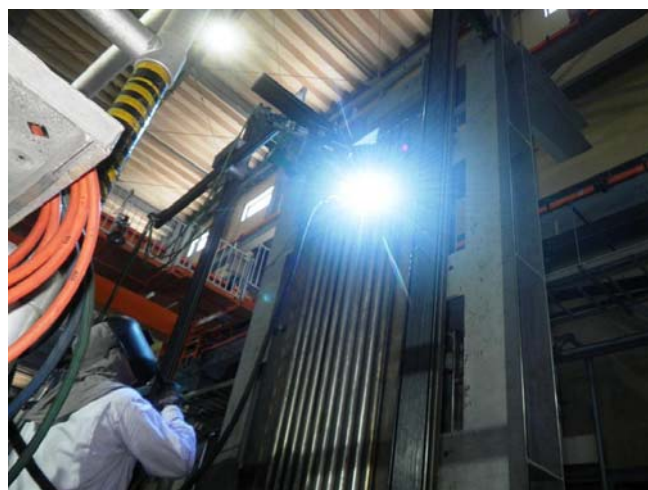
「金属加工全般を学び、溶接はそのなかの一つという意識だった」というが、在校時のオリエンテーションで青田名誉会長と出会い、創業間もなかった同社のビジネスと人づくりに対する姿勢に触れ、入社を決意した。

「入社後に当時の技術顧問であった清水茂樹博士が溶接の授業を担当し、同じころに入社した社員と一緒に、WEの教科書の輪読を通じて、一字一句をかみしめながら学び続けた。最初の3年間は今考えても、休日返上で懸命に勉強した」と振り返る。

そして福本社長自身、2004年にWE2級、翌年に1級を取得した。「現地施工の業務が入っている時でも、勉強ができるように教科書を持ち込み、時間を作った。一度にすべてを詰め込むのではなく、一章ずつ勉強を進め、過去問で確認することを繰り返した」。今も若手社員に対しては、「最初の3年間は仕事に没頭して勉強をする時期」と伝えている。



ローラ部品の自動肉盛溶接



ボイラパネルの自動溶接

## ●WE特別級を目指す

また昨年の社長就任後、社内の指導方法をやや変化させている。「社内の勉強会も、WE2級まではある程度は自主性にまかせるようにした」。超音波探傷をはじめとする検査関係など溶接以外に必要な資格が増えてきたこともある。

同社のWEでの目標は、現在14人いる1級取得者に、特別級を奨励していくこと。「現状は1級を取得した段階で、WEでは勉強が進んでいない面がある。社内の雰囲気においても、新人だけが学ぶのではなく、周りがさらに上を目指しているという姿勢を見せることが重要」と福本氏は語り、「私自身も特別級の取得に挑戦しないとイケませんね」と自身の抱負も語る。

## ●さらなる効率・高品質化を目指し

同社では肉盛溶接における自動化・無人化を「スマートウェルディング™」と称し、その実現に向けて取りくむ。自動肉盛溶接技術に加え、関連する検査・計測、研削等の周辺要素技術の技術レベルを向上させ、工期短縮と品質の向上を図り、各種プラントの長寿命化と高稼働率化を目指すものだ。

また新たな事業展開として、肉盛管や肉盛パネルを使った製缶物など独自製品を作る試みも行っている。「効率的に資源を大事にしながら設備・機器のメンテナンスや維持管理をする時代に入っている。現地作業では危険な現場もあるので自動化を積極的に進めていきたい」。

さらに、創業間もない頃から日本溶接協会の特殊材料溶接研究委員会と化学機械溶接研究委員会をはじめ、紙パルプ技術協会、火力原子力発電協会などの学協会へも積極的に参加し、技術の研鑽と肉盛溶接技術の向上に向けて取組んでいる。

最後に今後の抱負を伺うと、WEをはじめ技術者教育は継続しながら、「これまでは創業者である青田名誉会長による『文鎮型経営』だったが、今後は、基本理念は踏襲しつつ、一枚岩の上に皆が立ち、同じ方向に向かっていく組織体制を構築していきたい」と、力強く展望を述べてくれた。



肉盛部品と福本氏